保健体育教員養成課程における「実践的指導力」育成の検討
～教職インターンシップ実施の成果と課題～

藤原 昌太，佐久間 浩美，池谷 壽夫
了徳寺大学・教養部

要旨

本研究は，保健体育教員養成課程における教職インターンシップの実習内容と学びを分析し，実習生の「実践的指導力」の育成への成果と課題を明らかにすることを目的とした．平成28年度，平成29年度に教職インターンシップを行なった24名の実習生の活動報告書と自己評価票の自由記述を分析した．その結果，実習生は主に「授業」に関する「実践的指導力」の学びを得ていたことが明らかになった．課題としては実習内容にばらつきがあること，実習後の学習への関連性の意識の希薄さが明らかになった．

キーワード：教職インターンシップ，実践的指導力，授業

Consideration of practical leadership development in health and physical education teacher training courses
− Outcomes and problems of approaches to teaching internship −

Shota Fujiwara, Hiromi Sakuma, Hisao Ikeya
Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University

Abstract

The purpose of this research was to analyze the contents and learning of teaching internship in the health and physical education teacher training course, and to clarify the outcomes and problems to foster the practical leadership of the interns. We analyzed activity reports and descriptions of self-assessment charts of 24 trainees for the teaching internship, which we conducted during the educational years 2016, 2017. It was revealed that the intern trainees mainly learned practical leadership in relation to lessons. Moreover, it was apparent that there were variations in the content of practical training, and a low awareness of the relevance to the learning after the practical training.

Ⅰ．はじめに

平成27年12月に示された中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティーの構築に向けて～（答申）」[1)] において，「学校インターンシップ」の必要性が強調され，「教育実践に関する科目」の中に「学校インターンシップ（学校体験活動）」（2単位60時間）を含めることが認められ，教職課程の教科として位置づけられた．また同答申[1)] のなかで「学校インターンシップ」の重要性について「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで，学校現場をより深く知ることができ，既存の教育実習と相まって，理論と実践の往還による実

践的指導力の基礎の育成に有効である。また，学生がこれからの教員に求められる資質を理解し，自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義である」と述べている．つまり，「長期的な視点での学校の把握」,「実践的指導力の育成」,「自らの教員適性の把握」の3つの意義を有した活動であり，各大学では，教育委員会や近隣学校との連携を図り，それらを達成できる実習体制を整えることが求められている．また有吉[2]は教育職員養成審議会「養成と採用･研修との連携の円滑化について（第3次答申）」[3]が提起する，教師に求められる「地球的視野に立って行動する資質能力」における教師の「行動」は，一般社会人のそれとは異なり，教師としての「教育実践」活動と解するべきであり，教員養成において既存の特定の授業科目のみでは身につけさせることはおよそ望めないものであるとし，教員養成において「学校インターンシップ」の，特に「実践的指導力」育成への有用性を強調している．教師の指導の対象となるのは児童生徒である．教員養成課程の学生が，実践的指導力を身につけるためには，その対象である児童生徒を目の前にして対応すること，もしくは教師の実際の指導場面を経験することが最も有効的な学びであろう．

Ⅱ．本学での「学校インターンシップ」の概観

１．位置付け

上記を受け，本学では平成28年度に「教職インターンシップ」と称し，U市教育委員会と連携し，学校現場での実習を試行した．そして翌29年度より「教職に関する科目」に位置付け，正式に「教職インターンシップ」を開講した．本学での「教職インターンシップ」は,「教育実習指導」「教育実習Ⅰ・Ⅱ」とならんで「教育実習系」の授業の一環として位置付けられている．必修科目ではないが、教員採用試験受験する学生には受けるように指導している．

２．目的・意義

本学での「教職インターンシップ」は2年生ならびに3年生を対象としており，4年の前期6月～7月にかけて行っている教育実習の前に,「教師の仕事の重要性と全体像を学ばせ，教師に向けた自己の課題を自覚させる」[4]ことを目的としている．本学が掲げている「教職インターンシップ」の目的と意義は【表1】[4]の通りである．

【表１】了徳寺大学の教職インターンシップの目的と意義

（１）学校での仕事を、身をもって理解する

「教職インターンシップ」は、中・高保健体育教諭免許、養護教諭免許の取得を希望し教職に就きたい2年生以上の学生を対象に、実際に学校に行って、先生たちの仕事を見たり、手伝ったり、児童･生徒と触れ合ったりすることをとおして、まずは学校で仕事をするとはどういうことかを身をもって理解することを目的としています。

（２）教育活動の大変さとすばらしさを、身をもって学ぶ

2つ目に、「教職インターンシップ」で学校での先生方の活動にじかに触れることは、子どもを相手にした教育活動の大変さと同時にそのすばらしさを、身をもって学ぶことになります。今日の先生方の仕事の大変さを知ると同時に、それでも児童生徒のために日々頑張っている先生方、そうした先生

方の姿をとおして教育とは何かを考えてもらいたいと思います。

（３）自分の課題に気づく

３つ目に、「教職インターンシップ」の活動をとおして、「教員になりたい自分」に今何ができて何ができていないか、何がわかっていて何がわかっていないかを知ることになります。今の自分が抱えている課題が明確になり、教員になるにあたって、これから何を学ばなければならないかに気づく絶好の機会、それが「教職インターンシップ」です。

３．授業構成

本学では「教職インターンシップ」の授業を，①事前学習，②学校体験，③事後学習の3展開で授業を構成している．①事前学習では市内の小学校・中学校の校長先生より，学校現場での注意事項，教員の仕事について等の講話を受講し，それらを受け実習に対する心構えを学習する．また実習校決定後，実習前に学校訪問し，各学校の説明，日程等の調整を行なっている．②学校体験では，48時間の学校での実習を行うが，その実習内容は各学校によって異なる．③事後学習では，実習での学びをまとめ，報告会を行っている．

４．参加学生・実習校について

教職課程に在籍する2年生，3年生に希望を募り，平成28年度は小学校7校，中学校6校にて16名の学生が実習を行った．また平成29年度は小学校3校，中学校5校にて11名の学生が実習を行った．学生には実習参加希望の申し込みをする際に，実習希望校種を記入させているが，実習校と調整等を行った結果，希望する校種にならない場合もあった．

【表２】平成28・29年度「教職インターンシップ」参加学生数

	小学校	中学校	合計
平成28年度	8名（男子6名/女子2名）	8名（男子7名/女子1名）	16名
平成29年度	5名（男子4名/女子1名）	6名（男子6名）	11名

【表３】教職課程履修者における「教職インターンシップ」履修者割合

	2年生	3年生
平成28年度	28%（実習生参加5名/教職課程18名）	85%（実習生参加11名/教職課程13名）
平成29年度	100%（実習生参加6名/教職課程6名）	28%（実習生参加5名/教職課程18名）

※29年度における3年生の割合は該当年度おける履修者の割合を示しており，この割合に28年度に履修した学生を含めると55%となる．

Ⅲ．本研究の目的

上記のことを踏まえて，本研究は，保健体育教員養成課程における「教職インターンシップ」の実習内容と学びを分析し，実習生の「実践的指導力」の育成への成果と課題を明らかにすることを目的とした．

Ⅳ．方法

対象は本学保健体育教員養成課程に在籍し，平成28年度，平成29年度に「教職インターンシップ」に参加した学生であるが，その学生らが提出する「教職インターンシップ報告書」ならびに「教職インターンシップの自己評価票」の記述に不備がない24名を分析対象とした．それらの自由記述より「活動内容」,「学び」に関して，それぞれ抽出された記述をカテゴリー化し分析を行った．

Ⅴ．倫理的配慮

研究にあたっては，対象者に研究の趣旨を文書で説明し同意を得た上で実施した．なお，本研究は了徳寺大学の研究倫理審査（承認番号2937号）の承認を得て実施した．

Ⅵ．結果

1．「教職インターンシップ」での実習内容

本学での「教職インターンシップ」での実習内容は，【表4】に示す通りである．内容のカテゴリー化に関しては，平成27年1月20日の初等中等教育分科会チーム学校作業部会参考資料1「学校や教職員の現状について」にある「文部科学省教員勤務実態調査-業務の分類」[5] を参考にした．上記分類では「児童生徒の指導に関わる業務」,「学校の運営に関わる業務」,「外部対応」,「校外」,「その他」の5項目に分類されているが，今回本学の「教職インターンシップ」からは「児童生徒の指導に関わる業務」,「学校の運営に関わる業務」の2項目について抽出した．最も多かった実習内容は，「児童生徒の指導に関わる業務」の項目の「授業」で103件，次いで同項目の「学校行事」で67件であった．さらに，同項目「生徒指導（集団）」で43件，同項目「朝の業務」で34件であった．最も多かった「授業」では特に授業補助・見学を体験した学生が多かった．体育の授業への参加が多く，AT（アシスタントティーチャー）として授業に参加し児童生徒との関わりを多く体験していた．また，実習校が決定し日程を実習校側と調整する際に，多くの学校から運動会，体育祭の日程に合わせて参加して欲しいという要望もあり，多くの学生が運動会，体育祭の経験をしていた．「生徒指導（集団）」では，児童生徒と給食を取る機会があったと多くの学生が記述しており，また休み時間に一緒に遊んだ経験が多かった．「朝の業務」では多くの学生が，朝の職員会議と，児童生徒の朝の会，朝の学習に参加しており，中には朝の会を任された学生もいた．生徒に直接関わる体験をした学生が多く児童生徒への対応を学ぶ機会が多かったようである．また運動会や体育祭の準備などを体験し，学生自信が児童生徒であった時には見ることができなかった教員の裏方の仕事を体験できていた．「部活動・クラブ活動」では実際に指導したという記述も見られた．

【表４】「教職インターンシップ」での実習内容

大項目	中項目	小項目	述べ件数
児童生徒の指導にかかわる業務	朝の業務	・職員朝会 ・朝読書 ・朝の会	34
	授業	・授業補助・見学 ・授業参加 ・自習監督	103
	授業準備	・ライン引き ・グラウンド整備	16
	成績処理	・提出物へのコメント記入 ・テストのマル付け	8
	生徒指導（集団）	・体力テスト補助 ・給食・栄養指導 ・清掃指導 ・遊び指導 ・歯科検診補助 ・全校集会 ・美化活動	43
	部活動・クラブ活動	・部活動の指導・見学・指導補助	23
	児童会・生徒会活動	・体育祭実行委員会　見学 ・係、委員会活動	7
	学校行事	・体育祭 ・体育祭準備、練習 ・校外学習の帯同 ・終業式 ・始業式 ・その他交流会	67
	学年・学級経営	・誕生会 ・帰りの会 ・学年集会 ・日誌の記入 ・クラス内掲示物の作成	8
学校の運営にかかわる業務	学校経営	・校内見学 ・プールの清掃および安全確認	2
	校内研修	・校内授業見学会（授業見学）	1

２．「教職インターンシップ」での学び

「教職インターンシップ」での学びについての記述を抽出しカテゴリー化したものが【表5】である．「生徒観」,「コミュニケーション」,「授業」,「マネジメント」,「教師観」,「教育実習へ向けた学び」,「教師適正」の7項目が抽出された．「生徒観」に関して，特に記述の多かったのは小学校での実習を行った学生であった．学年の違い，学年やクラスの違いによる生徒の様子を感じ取り，それらへの指導の違いよる困難さに関する記述が見られた．机上の学びでの発育発達の観点は，性別や年齢等での差異であったりするが，実際の児童生徒を目の当たりにし，同性・同年齢であっても生じるその個別性を強く感じ取ったと考えられる．児童生徒の「目標・主体性」といった観点からの記述も多かった．ただ知識を教え込むのではなく目標を持たせたり，学びに対する主体性を育むことの重要性を理解していた．「コミュニケーション」に関して，「厳しい対応を」,「堂々と」,「ダメなことはダメ」等の記述がみられるように，学生は児童生徒と

【表５】「教職インターンシップ」での学び

大項目	小項目	具体的記述
生徒観	目標・主体性	・子供たちのはつらつさを再確認した ・児童に目標を持たせる大切さ ・生徒主体で活動させることで生徒の自主性を育む ・できる限り自分のことは自分でやろうという児童の自主性を引き出す
	進路	・小学6年生でも中学校について特に関心がない子供が多かった ・小学生では社会に出るための習慣づけ、意識付けが大切
	発育・発達・能力	・様々な学年の子供たちと接していく中でそれぞれの発達段階を感じ取ることができた ・各学年の子供たちの発育・発達に応じた指導が必要だと感じた ・小学校低学年は集中力の個人差が顕著
コミュニケーション	伝え方	・児童に教えたり伝えたりし、しっかりと理解させることの難しさ ・その場に応じた適切な声のかけ方。
	向き合い方・姿勢	・距離感の近くなり過ぎた生徒の指導方法について考えさせられた ・堂々とした立ち居振る舞いが大切 ・時には厳しい対応も必要だということ ・子供の顔色を気にするのではなく正面から向き合う姿勢が大切である ・児童生徒に自ら関わっていく大切さを学べた
	叱り方	・児童生徒に対してダメなことはダメとはっきり言う（あいまいにしない） ・全体での挨拶時の姿勢について注意する際には子供に問いかけるように考えさせていた ・教師の児童を叱る場面が参考になった ・子供たちの喧嘩をお互い不満の残らないよう仲裁していて参考になった
授業	授業観	・林間学校は観光ではなく学習活動であると理解させる大変さ ・授業で楽しませつつも、盛り上がりすぎて脱線しないよう注意が必要 ・児童生徒のための授業であることを理解し一人一人の児童生徒としっかりと向き合う ・一人ひとり進むスピードの違う中で決まった時間数で終わらせなければならない難しさがある ・問題の正解よりも、理解する過程を大事にしてもらうため、あえて回答への道筋のみを教え児童自身に答えを出させた ・体育は勉強の息抜きではなく、授業の一環である ・クラス全体を巻き込むような授業をしていた ・課題をみんなの前で発表させることで自己の理解度を確認させる狙いもある
	教材・指導展開	・水泳で水の怖い子供にはまずは肩まで、次に顔を水につける、などの段階を踏ませる ・体育授業でのIT機器の使用例を知ることができた ・ハンドボールの授業では戦術の話し合いの時間や売り帰りの学習カードの記入の時間を活用していた ・授業内で心拍数計を用いた授業例を知ることができた ・サッカーの授業では子供たちにWボードを渡すことで話し合いが深まる ・ゴールの数を変えたり、ボールの数を変えたりといった工夫を行っていた ・工夫次第で全員の活躍できる授業を行える ・授業内でグループワークを行うことで全員が自分の意見を言えるようにする ・発問を考えさせ、出た結果をまとめ理解させる、この流れが難しいと感じた ・水泳の授業では低学年では水に慣れることから、徐々に学年が上がるごとに実際の泳ぎへとつなげていた ・質問を投げかける際には選択肢を与えてあげると反応が返ってきやすい
	教師行動	・図画工作に授業では常に刃の前に手を置かないよう指導した ・児童生徒の聞き取りやすいトーンや声の抑揚 ・水泳ではプールサイドにいるのと、実際に水に入って授業補助するのでは見える範囲や手伝る範囲も違ってくる ・授業補助者として、子供たちにどのようにして教師の話を聞かせるか
	困難者への支援	・算数を苦手とする児童生徒への働きかけ ・複数学年のいる特別支援学級では、国語や算数などの授業は生徒がそれぞれ1対1で授業を行なっていた ・小学1年生では漢字もカタカナも一つの文字を教えるのに時間がかかってしまう

マネジメント	実習生への配慮	・担任の先生が児童に対して実習生に関するクイズを出題してくれたことで児童から積極的に話しかけてくれた
	広い視野	・クラス全体を見る広い視野が必要 ・子供たち全員に指示を通す難しさ ・その時の天候等や生徒の反応に応じて臨機応変に対応する能力が必要 ・教師一人で生徒を束ね動かす難しさを実感した
	学年・学級差	・それぞれの学年の雰囲気の違いを感じた ・低学年の子供たちには高学年に見本を示させることで双方の意識を高める ・同じ学年でも学級によっての雰囲気の違いを感じた ・小学1年生の教室ならではの工夫を知ることができた
	安全管理	・目の行き届かないところの安全をどう確保するか
教師観	連携	・教員同士の連携が取れていた ・子供たちをうまくサポートするためには教員同士の連携も不可欠
	教育観	・自分自身がぶれない目標や信念を持つことが必要 ・小学1年生の時期には生きていくうえで必要なことを根気よく教えていくことが大切 ・給食も教育の一環であるということ ・教職のやりがいを実感できた ・「やさしさ」と「教育」の違いを学んだ ・教師は良くも悪くも児童生徒の将来に大きな影響を与えてしまう ・自分の言動に自信を持つことが大切 ・自分の思う「教員らしさ」を見つけることが課題
	多忙さ・大変さ	・先生方の多忙さを再確認した ・生徒には見えない作業が多く存在する ・小学校では中高と違い全教科を教えなければならない大変さがある ・各行事ごとの準備の大変さを理解した ・教職の大変さを理解できた
教育実習へ向けた学び	具体的な準備	・実際の現場を見ることで、大学での授業もより具体的なイメージを持って臨めるようになった ・教育実習で自分が何をすべきか知ることができた
教師適正	自信,向上心	・教育者になるという自覚を深めた ・自分のアドバイスが子供たちにも喜ばれ、担当教員にも褒められ自信につながった ・教師になりたい気持ちが一層高まった
	課題の把握	・自分自身に教員らしさだ足りない ・深い専門的な知識が不可欠

接近する困難さはないようであり，むしろ接近しすぎた際の困難さに関する記述が見られた．教師は，児童生徒からただ好かれるだけではなく，適宜適切な指導を行わなければならないことを感じたようである．実習生が学んだと記述したもので最も多かったのは「授業」に関してである．授業とはどういうものであるかという「授業観」では，授業で児童生徒一人一人と向き合う重要性や，授業とは何を教えるものなのかというような観点からの記述が多い．授業での「教材・指導展開」に関する記述は特に多く，実際の教師の指導で用いられる教材が大いに参考になったとの記述も見られた．1コマでの授業の流れに関する記述や具体的な教材や教具の工夫やグループワークの方法など授業方法に関する詳細な記述も見られた．体育授業に関して生徒に合わせた段階的な指導展開の重要性の記述も見られた．また学生は，教師が話すトーンや授業の際の立ち位置など細かい「教師行動」を学び取っており，加えて児童生徒個々に生じる「困難者への支援」の重要性・困難さを理解していた．「教師観」に関しては，「やりがい」，「らしさ」，「信念」といった記述がみられた．学生自身が「教師とは」ということについて考える機会を得たようである．「教師適正」のカテゴリーの記述も鑑みると「やりがい」，「自信」といったポジティブな「教師観」を得た一方で「多忙さ・大変さ」も理解したようである．しかし，教師を断念したいといようなネガティブな記述は一切なく「多忙さ・大変さ」を理解した上でなお，ポジティブに「教師観」を感じとったことが示唆された．「教育実習に向けた学び」に関して記は，次年度，次々年度に自らが行う教育実習を具体的イメー

ジできたとの記述が見られた．しかし，教育実習につながるような具体的記述はほとんどなかった．

Ⅶ．考察

１．本学の「教職インターンシップ」における実習内容と学びの分析に見る「実践的指導力」の育成

実習内容の分析より，本学の「教職インターンシップ」は「授業」に関わる体験から得るものが多かったことが明らかになった．記述量からの推測であり，実際要した時間を正確に分析できてはいないが，授業に関する記述は103件と最も多く，また学生が学んだ内容の記述も「授業」に関わるものが多かった．特に「教材・指導展開」に関する記述が多くあり，教師の最も重要な仕事である「授業」に関する学びができていることが明らかになった．水泳の授業での教師の立ち位置に関する記述，サッカー授業での展開の仕方の記述なども見られることから，体育の授業の中で異なる単元の差異を意識した展開の方法，さらに加えて「小学校1年生では」,「算数を苦手とする児童生徒への働きかけ」など学年差，理解度の差なども考慮した，より実践的な指導方法を意識できたようである．学習指導要領にある教育内容は，児童生徒の発育発達段階に応じて段階的な指導を行うことを前提として構成されている．しかしながら実際の児童生徒は画一的でなく，実際の指導現場では児童生徒一人一人への対応が必要であり，その具体的な考察や理解をする機会は，教育実習や今回の「教職インターンシップ」をおいて他にはないであろう．その具体的な理解が「実践的指導力」の育成につながるのである．

また「コミュニケーション」や「生徒観」に関する学びの記述が多かったのは，学校行事などへの参加が多く，そこで普段の授業以上に児童生徒に深く接することができ，児童生徒に対する深い理解ができたためではないかと推測できる．その児童生徒の深い理解は実践的指導力の土台となると考えてよいであろう．部活動への参加，給食への参加，休み時間での遊びなどは，児童生徒の深い理解を可能とする場であること，そしてそれらが授業での指導へ繋がることを理解している様子が伺えた．さらに児童生徒への直接的な関わりだけではなく，教師は他の教師から多くの情報を得ながら児童生徒の理解を深めており，それが円滑な学校運営や，授業展開，児童生徒のサポートに繋がっていることを学んでいた．

「教職インターンシップ」に行く前に学生自身が持っていた知識や経験から形成されていた「生徒観」や「授業観」に対して,「再確認した」という記述もあるように，確認の機会になったり，逆にこれまでの考えを再考させられる場であるのが学校現場での学びであると言える．かつては教職課程の学校での実習といえば「教育実習」のみであったが，それらの事前にそういった学びが可能である「教職インターンシップ」は学校現場での実践的な学びと大学での理論的な学びのさらなる往還の機会となり，「実践的指導力」をより確かなものにできると考えられる．

２．本学の「教職インターンシップ」における課題

本学の「教職インターンシップ」では，その実習内容に各実習校でのばらつきがあったことが改善点の一つとして挙げられる．実習時期や内容については，実習校と話し合いはするが，基本的には実習校に任せており，実習時期によっては体育祭の前の一週間のみで体育祭の準備しか経験できなかった学生や，一方授業見学だけしか行っておらず教科指導に関する学びだけで，その他の学校行事等に全く関わることがなかった学生もいた．朝の職員会議や朝の会への参加に関してもそのばらつきがあった．前述もしたが，学校側からはとにかく人手が必要な体育祭前に実習生に来てもらって，手伝って欲しいという要望が多かった．学校側との打ち合わせや，実習生の報告書への実習担当教員の記述より，本学の「教職インター

ンシップ」ならびに文科省が推進する「学校インターンシップ」の設定の意図が学校に伝わっていないことが伺えた．また本学の所在する県では県教育委員会が主催するインターンシップ制度があり，それと混同している教員もいた．本学としては，本学が行う「教職インターンシップ」と，県教育委員会が行うインターンシップとの明確な線引きが今後必要なのではないかと考えられる．本学の「教職インターンシップ」の意義・目的を今一度実習校側に明確に伝える必要がある．

さらに本学の「教職インターンシップ」の意義・目的に謳っている「今の自分が抱えている課題が明確になり、教員になるにあたって、これから何を学ばなければならないかに気づく」という観点において実習生の記述がほとんど見られなかったことは課題であると考えられる．学生の記述より，多くの実践的指導力に関する学びを得たことは明らかになったが，それらを実習後の大学での授業にどう関連づけるのか，また実習生が翌年以降行う「教育実習」にどう繋げていくかという観点が理解できている学生が少ないことが示唆された．学校現場での実践的な学びは，大学での理論的な学びとの往還があって，より有意義に機能するものである．その往還の視点を持って学ぶ意識を高められるような教職カリキュラムを構築することが今後の課題である．

Ⅷ. 結語

本研究より，本学の「教職インターンシップ」は学生の「実践的指導力」の育成に大いに寄与できることが明らかになった．しかし，実習内容にばらつきがあること，実習で得た学びを，実習後の自らの学びに結びつけるという観点があまり見られなかったことが課題として明らかになった．今後の研究として，学生の記述の学年差を分析することや，本論でも少し記述したが，学校での実習担当者の記述や話も含めての包括的な分析が必要である．それらは本学の教員養成課程のカリキュラムの再編成の一助となるであろう．

文献

1）中央教育審議会：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティーの構築に向けて～（答申），文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf（2017.11.28 10:00アクセス）

2）有吉英樹（2009）実践的指導力の育成を目指す教員養成教育の在り方-岡山大学教育学部の場合-.岡山大学附属教育実践総合センター紀要．9，73-82.

3）教育職員養成審議会：養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申），文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315385.htm（2017.11.29 17:00アクセス）

4）了徳寺大学教職課程委員会（2017）教職インターンシップガイドブック平成29年度版.了徳寺大学教職課程委員会，2-3.

5）文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課：学校や教職員の現状について，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/052/siryo/__icsFiles/afieldfile /2015 /02 /18/1355024_4.pdf（2017.11.28 13:00アクセス）